

主 題：自分の死について考える

聖書箇所：詩篇 39篇

テーマ：必ず“終わりの日”がやって来る中で、どのようにして忠実に生きていくのか

今朝、皆さんとともに見ていきたいみことばは詩篇39篇です。きょうの内容に入っていく前に、まず一つ質問があります。皆さんは田中カ子（かね）さんという方をご存じでしょうか？この女性は今年の4月19日に亡くなるまで、存命中の世界最高齢としてギネス世界記録に認定されていた人物でした。明治36年1月2日に福岡県で生まれた田中さんが老衰で亡くなられた時、彼女は119歳でした。ふと自分の91歳年上だったのかと考えてみると、その途方もない数字にひとり驚いてしまいましたけれども、世界を見渡してみると、まだ上もいました。現代の世界において最も長生きしたとされているフランス人女性ジャンヌ＝ルイズ・カルマンという人物はなんと1997年に亡くなるまで122年と164日間も生きたとされています。私の94歳も年上です。どちらの女性も驚くほど長寿の人生を過ごされました。それはすばらしいことです。でも皆さん、悲しい現実はこちらの女性も最後にはこの地上での終わりを迎えたということです。

どんなに長生きをしていたとしても、人は必ず“死”という避けられない現実と直面する日がやって来ます。そしてそれはきょうを生きる私や皆さんひとりひとりも変わりません。今高齢であろうと、若かりょうと、富んでいようと、そうでなかろうと、さまざまな地位や権威を持っていようと、持っていないが、どんな人も例外ではありません。いつその日を迎えるのか、どんなふうにその日を迎えるのかはわからなかったとしても、いつの日か必ず私たちはみな死ぬ時がやって来るのです。これは揺らぐことのない事実です。果たして私たちは、この“死”という現実を普段の生活の中で考えることはあるでしょうか？私たちは一日一日確実にその日に近づいている中であって、自分に残された日がもうわずかであると、どれだけ正しく覚えているでしょう。確かに自分の死について考えることは、私たちにとって余り喜ばしくない、よい気がしないもののように思うかもしれませんが、ある人はそんな暗い話はしないで、今を普通に生きればよいではないですかと言われるかもしれません。またある人は死が自分の身近に差し迫ったものであると感じられないがゆえに、死について考えることを余りしないかもしれません。

でも聖書はそうは教えていませんでした。聖書は私たちが自分のいのちのちのかなさや人生の短さというものを覚えることの大切さを教えてくれているのです。例えば、あのモーセもこのように主に祈っていました。詩篇90：10-12に「:10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。:11 だれが御怒りの力を知っているでしょう。だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。その恐れにふさわしく。:12 それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」とあります。こうして自分の死を正しくとらえるということは、今の私たちにとっても重要なことです。必ずやって来る終わりの日を忘れないということは、私たちが自分自身の歩みをよく振り返り、何よりも自分と神様との関係を、神様の姿を正しく見ることにつながるのです。終わりを考えるということは、それぞれの今の生き方に大きな影響を与えることとなります。

そして、きょう私たちが見るこの詩篇39篇もそのことを教えてくれています。この詩篇を記したダビデも4節で「【主】よ。お知らせください。私の終わり、私の齢が、どれだけなのか。私が、どんなに、はかないかを知ることができるように。」と神様に願っているのです。ダビデはこれまでに見た多くの詩篇と同様に、この詩篇を記した時も数多くの苦しみを味わっていました。自分の罪深さを示されて、ひどい困難の中に置かれていたのです。しかしそのような苦しい状況の中で、彼は自分の終わりを正しく覚え

ることで、神様の前を忠実に歩もうとし、希望を持って歩むことができました。そんな姿から私たちも大切なことを学ぶことができます。

○ダビデの姿：忘れてはならない四つの教訓

ですから、きょうは改めて自分の人生の短さ、“死”に関連してみことばが教えてくれていることを一緒に考えてみましょう。特に私たちは、この詩篇に描かれているダビデの姿から四つの忘れてはならない教訓を見て取ることができます。その教訓をもって、私たちが地上で残された日々をどのようにして歩いていくべきなのか、よく自分自身のこととして考えてみましょう。このみことばが皆さんの励ましになることを心から祈っています。それぞれの教訓を学んでいく前に、まずいつものようにみことばをお読みします。

詩篇 39 篇 指揮者エドトンのために。ダビデの賛歌

「:1 私は言った。私は自分の道に気をつけよう。私が舌で罪を犯さないために。私の口に口輪をはめておこう。悪者が私の前にいる間は。:2 私はひたすら沈黙を守った。よいことにさえ、黙っていた。それで私の痛みは激しくなった。:3 私の心は私のうちで熱くなり、私がうめく間に、火は燃え上がった。そこで私は自分の舌で、こう言った。:4 【主】よ。お知らせください。私の終わり、私の年齢が、どれだけなのか。私が、どんなに、はかないかを知ることができるように。:5 ご覧ください。あなたは私の日を手幅ほどにされました。私の一生は、あなたの前では、ないのも同然です。まことに、人はみな、盛んなときでも、全くむなししいものです。:6 まことに、人は幻のように歩き回り、まことに、彼らはむなく立ち騒ぎます。人は、積みたくわえるが、だれがそれを集めるのかを知りません。:7 主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。:8 私のすべてのそむきの罪から私を助け出してください。私を愚か者のそしりとししないでください。:9 私は黙し、口を開きません。あなたが、そうなされたからです。:10 どうか、あなたのむちを私から取り除いてください。あなたの手に打たれて、私は衰え果てました。:11 あなたは、不義を責めて人を懲らしめ、その人の望むものを、しみが食うように、なくしてしまわれます。まことに、人はみな、むなししいものです。:12 私の祈りを聞いてください。【主】よ。私の叫びを耳に入れてください。私の涙に、黙っていないでください。私はあなたとともにいる旅人で、私のすべての先祖たちのように、寄留の者なのです。:13 私を見つめないでください。私が去って、いなくなる前に、私がほがらかになれるように。」

1. あかし人であることを忘れない 1-3 節

さて、まず一つ目の教訓としてダビデのうちに見て取れるものは、あかし人であることを忘れないということです。ダビデは愛する神様を人々の前でどのようにあかしをするのか、細心の注意を払っていました。このように1節から始まっています。「:1 私は言った。私は自分の道に気をつけよう。私が舌で罪を犯さないために。私の口に口輪をはめておこう。悪者が私の前にいる間は。:2 私はひたすら沈黙を守った。よいことにさえ、黙っていた。それで私の痛みは激しくなった。」、いったいダビデはここで何を言わんとしたのでしょうか？そのことを理解する上で大切になるのは、彼の置かれていた状況を確認することです。先ほど詩篇全体を読んだ時に気づかれた方も多いと思いますけれども、ダビデはこの時自分の犯した罪が原因で、その罪に対する神様からの懲らしめを受けていました。厳しい責めを受けて、彼自身は大いに苦しんでいたのです。10節にも「どうか、あなたのむちを私から取り除いてください。あなたの手に打たれて、私は衰え果てました。」と書かれていました。具体的にダビデがこの時どんな罪を犯していたのかは私たちにはわかりません。しかし、何かしらの罪を犯した彼の間違いを正そうとして、神様は愛のゆえに彼を懲らしめておられました。そしてそれが余りにも厳しいものであったからこそダビデは打ち砕かれ、肉体的にも精神的にも完全に弱り果てていたのです。ダビデはそんな苦しい状況の中に置かれていました。

その中にあって、自分の歩み、特に発言することばに関して注意を払っていたのです。彼は懲らしめに置かれている中で、だれに何を口にするのかを気をつけていました。ダビデはほかの詩篇ではいろいろなことを口にするがありました。例えば、詩篇 10 : 1 では「【主】よ。なぜ、あなたは遠く離れてお立ちなのですか。苦しみのときに、なぜ、身を隠されるのですか。」と言っていましたし、また 13 : 1 にも「【主】よ。いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで御顔を私からお隠しになるのですか。」と言っていました。また 22 : 1 でも「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。」とありました。こうしてダビデは主の前に自分自身の抱えている疑問や葛藤、不安や恐れを正直に告白していたことは多々ありました。

でも、この詩篇 39 篇では違ったのです。彼はそのようなことばを一切口から出さないようにしていました。彼は自分の口に口輪をはめるように、たとえよいことであろうとも、ひたすら沈黙を守ろうとしていました。1 節の最後のところに「**悪者が私の前にいる間は**」と書かれていました。なぜダビデは黙っていたのでしょうか？それは自分の前に神様に逆らおうとしている、神様に従おうとしない悪者たちがいたからでした。神様に逆らう者たちが自分の周りにいたからこそ、彼は自分の語ることばに気をつけていたのです。そしてこれは、神様の栄光をあかししたいと願うダビデにとって非常に大切なことでした。なぜなら、もしダビデが悪者たちの前で、神様に向かって疑いや苦しみを打ち明けたとすれば、たとえそれが正直なものであったとしても、悪者たちはダビデが神様に不満を口にしているように見えてしまうでしょう。例えば「主よ、なぜですか」、「どうして今なのですか」、「なぜ私がこんな辛い目に遭わないといけないのですか」とことばにすれば、彼自身のうちでは神様に逆らう思いがなかったにしろ、周りの人々が見れば非難しているように見えて、誤解を生み出してしまうこともあるでしょう。そうすれば、ダビデ自身が責められるだけではなくて、彼の愛する神様のことを悪者が悪く言うことへとつながってしまうのです。神様の栄光を現したいと願っているのに、その栄光を傷つけるような機会を人々に与えてしまうことになるのです。悪者は言うかもしれません。ダビデさん、あなたは神様がどんな時も信頼できる誠実な神様だと言っていましたけれども、すべてのことを支配している主権者だと訴えていたけれども、あなた自身も疑いを抱えているのではないのですかと。実際のところ、神様にはあなたを助ける力すらないのではないのですかと。信仰者のふるまいやことばというものが、ほかのだれでもない神様の偉大な御名に泥を塗ることにつながってしまう、そんな危険があることをダビデはよくわかっていました。それゆえに彼は自分自身の発言することばに細心の注意を払っていたのです。

もちろんこれは彼にとって容易なことではありませんでした。ダビデ自身にとっても、口を閉じて話さないということは、大きな葛藤を生み出すものだったのです。だから 2-3 節に「私はひたすら沈黙を守った。よいことにさえ、黙っていた。それで私の痛みは激しくなった。:3 私の心は私のうちで熱くなり、私がうめく間に、火は燃え上がった。」と書いていました。ダビデは正直だと思いませんか？彼はひどい苦しみを味わう中にあって、黙っていたことで自分自身の心が激しく痛んでいました。話せないということで、まるで火が燃え上がるかのように彼の中では不安や恐れが大きく広がって、次第に心が重くなっていったのです。自分が置かれている状況を考えれば考えるほど、神様、どうしてなのですかという思いが大きくなって、痛みもだえていました。ですから、ダビデにとって黙っていることは簡単なことではありませんでした。彼の心のうちには大きな葛藤が現れたのです。でもダビデは、そんな自分自身の状況を理由にして、神様の栄光が傷つくようなことをしようとはしませんでした。仕方ないと妥協するのではなくて、罪を犯さないようにといつまでも沈黙を保っていたのです。

これはあたしたちにとっても、とても重要なことです。自分自身の歩みを少し振り返ってみてください。果たして私たちは、私たちのふるまいやことばにどれほど気をつけているのでしょうか。私たちの愛する神様の御名が傷つくようなことを、どんなものでもよしとはしていないのでしょうか。自分がひどく

傷ついているような時は特にです。この世にあって、神様のすばらしさをあかしすることよりも、自分の思いを優先していないでしょうか。自分が傷ついているような時は、神様の栄光を現すことより、自分の思いをぶちまけよう、神様の栄光を現すことを妥協してもかまわないと思っているのでしょうか。地の塩として、世界の光として生かされている私たちは、いったいどんな神様をこの世にあって証しようとしているのでしょうか。イエス様もマタイ5：16で「このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」と口にされていました。覚えておかなければいけないことがあります。それは私たちのことばやふるまいは、いつも周りの人に見られているということです。私たちが何を話すのかも、私たちがどのように話すのかも、また、今の時代であれば、メールやラインやまたフェイスブックみたいなもので、どんなことばを使っているのかも、それらはすべて私たちが立てるあかしになります。そのあかしを見た人々がすばらしい神様の栄光をほめたたえることにつながる歩みをしているのかどうか。私たちがことばを見た人たちが私たちの神様を決して侮ることがないように。たとえ私たちの置かれている状況が自分にとってつらく悲しいものであったとしても、神様を知らない者たちのつまずきには絶対にならないように。自分のことばやふるまいがあかし人としてふさわしいのかを、私たちはいつも気をつけていなければいけないのです。ダビデは罪を犯さないためにひたすら沈黙を守っていました。彼自身は神様の懲らしめにあつて、深い痛みや嘆きを覚えていたのです。彼の心はいっぱいいっぱいになっていました。でも、何よりも神様のことを一番に愛した彼は、その神様が傷つけられるのであれば、自分は黙っていようとしていました。神様が傷つくことから、自分はどうかして離れようとしていたのです。

さて、ここまで聞いてきて、ある人はこう思ったかもしれません。では私たちはどんなつらいことがあったとしても、とにかくいつも黙っていないといけないのですね、何があろうと口を開いてはいけないのですねと。でもそうではありませんでした。ダビデは抱えている重荷や悩みをいっさいだれにも口にしてはいけないと教えていたのではなかったのです。ダビデは3節の終わりで「私の心は私のうちで熱くなり、私がつめく間に、火は燃え上がった。そこで私は自分の舌で、こう言った」と口にしていました。ダビデは悪者の前で黙っていました。しかし、自分のうちで余りにも苦痛が増し加わったからこそ、遂に彼は口を開いたのです。では、彼は今まで述べてきたことを全部ひっくり返して、人々の前で自分の思いをぶちまけたのでしょうか。もちろんそうではありませんでした。では、いったい彼はだれに心の苦しみを打ち明けていたのでしょうか？4節の初めに「【主】よ。お知らせください」と書かれていました。彼は悪者たちの前ではなく、そこから身を引いて主に向かって祈っていました。耐えられないほどの痛みを覚えていたダビデは、人々の前ではなくて、自分を助けることのできる唯一のお方、神様に向かって自分の思いを正直に告白していたのです。そしてその祈りの内容こそが二つ目の教訓として学ぶことができるものになります。

2. 人生のはかなさを忘れない 4－6節

二つ目の教訓は、人生のはかなさを忘れないということです。もっと言えば、人の一生がどれほど短くて、一瞬のものであるのかということや、いつも正しく覚えているということです。もう一度4節を見てください。ダビデは主に「【主】よ。お知らせください。私の終わり、私の齢が、どれだけなのか。私が、どんなに、はかないかを知ることができるように。」と祈っていました。ここに私たちはダビデのすばらしい模範を見て取ることができます。彼は、この時耐えられないほどの苦しみの中に置かれていたのです。黙っていたことによってうめき苦しんで、もう限界を迎えていたからこそ、彼はほかのだれでもない神様に向かって声を上げていました。私たちが彼の立場だったとしたら、最初にどんなことを口にします？もう限界です、苦しみの中でどうしようもなく、耐えに耐えて発言する私たちの第一声は、どんなものでしょう。こんなことばが容易に出てくるかもしれません。神様、私の置かれている状況を顧みてください、私は弱り果ててしまっています。どうかこの苦しみを取り除いてください。もしくは神様、

なぜこんな苦しみを私に与えるのですか、どうしてこんな痛みをもたらすのですかと口にすることもできません。もちろん神様のあわれみを求めること自体が間違っているわけではありません。ダビデ自身も同じ詩篇の中で、神様の助けを求めています。でも、懲らしめを受ける中で、彼が一番に願っていたことは助けではありませんでした。では彼はいったい何を祈り求めていたのでしょうか。4節で彼は「【主】よ。お知らせください」と祈っていました。彼は神様の前にへりくだっていました。自分自身の弱さを認めていました。そして私に教えてくださいと願っていたのです。懲らしめを受けて、弱り果てている中で、彼は神様に聞き従うことを何よりも求めています。彼は自分の思いに左右されるのではなく、何よりも神様の知恵に導かれることを望んでいたのです。

そしてそんな彼は自分の終わりを、いかに自分の人生がはかないものであるかをよく理解することができるようにと祈っていました。その後、4節で「私の終わり、私の齢が、どれだけなのか。私が、どんなに、はかないかを知ることができるように」と続きます。私たちは時に自分の人生において間違った考え方をしてしまうことがあります。この世のことにのみ心がとらわれて、本当に大切なことから目をそらしてしまうことがあるのです。目の前で起きていることがすべてであるかのように私たちには思われて、一歩下がって自分の一生が実はすぐに過ぎ去ってしまうものであるということを見られないことがあります。私たちは、この世のことに心が奪われて、神様の前に、人が本来どのような存在なのかということをおぼろげに忘れてしまうことがあります。だからこそこのダビデのように祈ることは、私たちにとっても絶対に欠かせないことになるのです。

続く5節を見れば、ダビデは「:5 ご覧ください。あなたは私の日を手幅ほどにされました。私の一生は、あなたの前では、ないのも同然です。まことに、人はみな、盛んなときでも、全くむなししいものです。:6 まことに、人は幻のように歩き回り、まことに、彼らはむなしく立ち騒ぎます。人は、積みたくわえるが、だれがそれを集めるのかを知りません。」と祈っていました。ダビデは間違いなく神様の前に自分のいのちがはかないものであること、短いものであることをよくわかっていました。5節で彼は「あなたは私の日を手幅ほどにされました」と述べていましたけれども、この「手幅」というのは、古代イスラエルの社会において最も小さい測りとして用いられていたものでした。手の親指を除く4本分の幅がこの「手幅」のことです。ですから、ここでダビデが「あなたは私の日を手幅ほどにされました」と述べた時に、彼が言わんとしたことは明白でした。自分のいのちは「手幅」のように余りにも短いものだということです。彼は自分の一生がほんのわずかなものであることに気づいていました。人の一生というものは、私たちの目には長く見えたとしても、永遠に変わることはない主の前では、ほんの一瞬で過ぎ去ってしまうものでしかなかったのです。そしてそれは、どれだけ栄えている人であろうとも変わりません。考えてみてください。どれだけ権力や財産を持っている人であろうとも、時が経てば忘れ去られてしまいます。どれだけしっかり立っているような人であろうとも、揺るがないような重要な役割を持っているような人であろうとも同じです。それが証拠に、例えば第11代の日本の総理大臣を覚えていますか？それはこの間亡くなった安倍総理に次ぐ第2位の在職日数を記録した桂 太郎でした。日本のトップであったような彼がどんな功績を残していたのか、そのすべてを覚えていますか？恐らく覚えてはいないでしょう。どんなに権力や功績を残した人であろうとも、現実を見れば、次第に忘れ去られてしまうのです。これがだれの目にも明らかな事実でした。これがみことばが教えてくれている人の本来の姿でした。たとえそれがどのような人であろうとも、その人が地上でどれだけ栄華をきわめることがあろうとも、必ず死はやって来ます。どれだけ地上で、いろいろな名声や地位を求めて、財を一生懸命に蓄えていたとしても、一瞬でその時は終わってしまうのです。だからこそ、私たちはみんな本当に価値のあるものに心をとめることが大切でした。

かつてヤコブもこのように口にしています。ヤコブ4：13－15に「:13 聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう」と言う人たち。:14 あなたがたには、あ

すのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。:15 むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」と。またここで述べられていることと同じようなことを例え話の中でイエス様が教えておられました。ルカ12:16-21に「:16…ある金持ちの畑が豊作であった。:17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』:18 そして言った。『こうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。:19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』:21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。』とありました。ヤコブやイエス様が教えてくれていたことは明白でした。それは私たちのこの地上での人生というものは短くて、そして必ず終わりがあるということです。たとえどれだけいろいろな計画を立てていたとしても、そのいのち自体が取られてしまえば、何の意味もなしません。本当に価値のあるもの、言いかえれば、永遠なる神様に結びついていなければ、すべてが空しいと言うのです。

3. 唯一の希望を忘れない 7-11節

ダビデはその事実を覚えていました。彼は神様の前にどれほど自分がはかなく、小さな存在なのかということを忘れてはいませんでした。だからこそ、彼はここで立ち止まることなく、その神様に続けて祈るのです。そして、その祈りのうちに、私たちは三つ目の教訓を見て取ることができます。まず先に7節のところに「主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。」と記されていました。厳しい懲らしめによって大いに苦しんでいて、自分の人生がはかないものであるということを正しく覚えた時に、ダビデはただ唯一の希望である主を求めたのです。これが三つ目の教訓、唯一の希望を忘れないということです。ここでこの7節のダビデのことばによく注目してみてください。彼は主に叫んでいました。彼は主に向かって、何か私に希望をもたらしてくれるものや状況を与えてくださいと願ってはいませんでした。ましてや彼は自分自身の置かれたその苦しい状況にあきらめを抱いていたのでもありませんでした。彼はここで望みそのものである主ご自身を待ち望んでいたのです。ダビデの味わっていた苦痛はひどくつらいものでした。神様の懲らしめによって衰え果てていたのです。また、彼はそんな苦しみを受けている自分の人生というものが一瞬で過ぎ去ってしまうはかないものであると覚えていました。だとすると、いったい何の目的で自分はこんな懲らしめを受けているのでしょうかと考えてもおかしくなかったと思いませんか？なぜそもそもこんなあつという間の人生の中で、神様によって責められて、ここまで苦しまなければならないのでしょうか、どこにも意味を見出すことができません、こんな神様なら自分は必要ありませんと。こうやって自分の置かれた状況に不満や怒りを抱いて、人生のはかなさに失望して、神様以外の何かに希望や助けを見出そうとしていてもおかしくはなかったかもしれませぬ。でもダビデは決してそうはしませんでした。厳しい懲らしめによって心が砕かれて、自分の弱さや無力さに気づかされた時、彼はそんな希望の見えない状況の中からでさえ、唯一助けを与えることのできるその希望に目を向けていたのです。ほかの何物でもなくて、もちろんはかなく消えてしまうような自分自身のうちにでもなくて、ただ永遠なる神様のうちにへりくだって、彼は自分自身のすべてを委ねていました。

そして、8節から「:8 私のすべてのそむきの罪から私を助け出してください。私を愚か者のそしりとししないでください。:9 私は黙し、口を開きません。あなたが、そうなさったからです。:10 どうか、あなたのむちを私から取り除いてください。あなたの手に打たれて、私は衰え果てました。」と祈るのです。ダビデは希望である神様がどのようなお方なのかだけではなくて、自分自身の罪深さについてもはっきりとここで認めていました。彼は今、自分がひどい懲らしめを受けているのは、自分に責任があるということを素直に受

け入れていました。彼は自分の罪を罪として認めて言い訳をすることも、正当化をすることもなく、懲らしめが神様からのものであると覚えていたのです。でも同時に、そのようにして自分の罪を素直に認めた上で、彼はただ神様のあわれみによってすべての背きの罪から自分が助け出されることを願っていました。主のむちがあわれみによって取り除かれることを熱心に求めていました。ダビデは、自分は罪を犯し、本来であれば当然懲らしめが値するとわかっていたのです。主がどうしようもない自分の置かれている状況を顧みてくださって、弱り果てている自分を守ってくださるようにと、周りに非難するような、そしるような者がいるけれども、そのような者から自分を援護してくださるようにと、主のあわれみを願っていたのです。

こうして自分自身の弱さを正しく覚えていたダビデは、唯一の希望である神様に目を向けていました。また、続く11節を見ても、このように彼は言うのです。「あなたは、不義を責めて人を懲らしめ、その人の望むものを、しみが食うように、なくしてしまわれます。まことに、人はみな、むなしいものです。」と。ここで「しみ」と訳されていることばですけれども、これは何か液体をこぼして汚れがつくあのシミのことを言っているのではありません。このことばは衣服などを食い荒らす虫食いのことを意味しています。神様は、まるで衣服を跡形もなくなるまで食い尽くす虫食いのように、人々が宝だと思っているもの、宝としているものを懲らしめによってなくしてしまうことができるお方なのだと、ダビデは言いました。ある人にとっては譲ることのできないその宝は、時に自分の財産や持ち物かもしれません。ある人にとって、それは健康や趣味かもしれません。何を自分の宝と思っているのかは皆さん自身がよく知っているでしょう。しかし、それがたとえどんなものであろうとも、神様は愛する者に厳しい戒めを与えて、神様以外の何かを宝とするその心を砕かれることがあると言うのです。人が何を願ったとしても、神様にはそれを簡単に打ち砕くことも、簡単にそのものを取り上げることもできる力がありません。だからこそ、このような偉大な力ある方、神様の前では、ダビデが言うように人はみな無力では空しいものにしかすぎないのです。

ダビデは自分自身のはかなさを覚えていました。そして同時に神様の偉大さを覚えていました。自分の人生が短いのと同時に、神様がいつまでも永遠のお方であるということも覚えていました。そんな神様の前に自分が何もないはかない罪深い存在であるということも告白し、ダビデはそのことを認めていたのです。そして、その神様の前にへりくだった態度をもって、どんな時も揺るぐことのない唯一の希望をこの方のうちに見出していました。だとすれば果たして私たち自身は苦しみを味わうような時、どこに助けを見出しているでしょう。自分自身の無力さを覚える時、自分自身のはかなさを覚える時、いったいだれのうちに希望を見出そうとしているでしょう。

4. 本当の住まいを忘れない 12-13節

そして最後四つ目の教訓として見て取れるものは、本当の住まいを忘れないということです。厳しい懲らしめによって苦しんでいて、自分の人生のはかなさを目の当たりにする中、主に希望を見出したダビデは最後に自分の真の住まいがどこにあるのかということも正しく覚えていました。最後12-13節はこのようにまとめられています。「:12 私の祈りを聞いてください。【主】よ。私の叫びを耳に入れてください。私の涙に、黙っていないでください。私はあなたとともにいる旅人で、私のすべての先祖たちのように、寄留の者なのです。:13 私を見つめないでください。私が去って、いなくなる前に、私がほがらかになれるように。」と。読んですぐ気づかれたと思います。ダビデはここでも自分の苦痛や嘆きを主の前に素直に言い表していました。彼は余りにも厳しい責めを受けて、涙を流して神様に助けを与えてくださいと訴えていたのです。彼は主の懲らしめというものが、これ以上続くのであれば、最後にも書いていたように、自分はもう死んでいなくなってしまうとさえ考えていました。間違いなく彼は肉体的にも精神的にも追い込まれていたのでしょう。

しかし、そのような中であって、彼は一見不思議なことを口にするのです。12節のところで「私はあなたとともにいる旅人で、私のすべての先祖たちのように、寄留の者なのです」と口にしていました。いったい何を言わんとしたのでしょうか。ここで用いられていた「旅人」と「寄留の者」ということばは、どちらもある土地に一時的に住む人のことを表わすものでした。前者は短期間、後者は長期間滞在するような人々のことを指すのです。このような人々というのは、滞在するその土地にあって、民からよい扱いを受けることができました。でも同時に、彼らは自分の土地を所有することは許されてなかったのです。彼らは自分の土地を所有する権利を持っていませんでした。言いかえれば、彼らはその土地にあって、よそ者として扱われる存在でした。永住者ではなかったのです。ダビデはそんなことばをここで自分自身に当てはめていました。つまり、彼は自分自身のことを一時的な滞在者だと考えていたということです。彼にとってこの地上での生活は自分のすべてであるにとらえていたのではありませんでした。ダビデは自分の本当の住まいが一瞬にして過ぎ去ってしまうような、この地上にあるのではなくて、永遠に続く天にあることをわかっていたのです。そうして彼は将来に目を向けて希望である神様とともに忠実に歩もうとしていました。

そしてこれはキリストによって救われ、同じ信仰を持つ私たちひとりひとりも同じです。私たちが今はまだ本当の住まいに帰ったわけではありません。確かにこの短くてはかない地上での人生にあって、私たちは数多くの苦しみを味わうことがあります。時に自分の犯した罪が原因となって、主の懲らしめを受けて、大いに悲しむこともあったりするでしょう。それぞれに受ける痛みは違います。理解できない状況に置かれて、痛みが長引けば、いったいなぜですかと疑問を抱いてしまうこともあるでしょうし、余りにも自分の目の前で起きていることが手に負えなければ、いつまでこれが続くのですかと不安や恐れを抱くこともあるかもしれません。でも、そんな時にこそ私たちの住まいはこの世ではないと覚えることができます。どんなに私たちの目の前で起きていることが、私たちの目には長く思えたとしても、永遠の神様とそれを比べてみれば、すべてが一瞬で過ぎ去ってしまうものでしかないのです。そして、必ずいつの日か、私たちにも死がやって来て、本当の住まいである天で一生を過ごす日がやって来るのです。パウロははっきりとこう教えてくれていました。ピリピ3：20に「けれども、私たちの国籍は天にあります。」、地上にはありませんと。私たちは今ただキリストのみわざによって救われ、天に国籍を置いて生きる者へと変えられました。一時的なものではなく、永遠に価値のあるものに確信を置いて生きていくことができる者へと変えられたのです。だとすれば私たちは果たしてそれにふさわしい歩みを日々しているのでしょうか？私たちがこの世が一時的なものであることを本当に信じているのであれば、私たちは普段何に心を留めて、何にいつも心を向けて歩もうとしているのでしょうか？一時的なもので、一瞬にして消え去ることをわかっているながら、私たちが求めているものは、地上のもののでしょうか？それとも本当に価値のあるもの、天にあるものを思っているのでしょうか？

ペテロもこのように述べていました。Iペテロ2：11に「愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。」と。果たしてこの地上での生活が本当に一瞬のものであると信じているのであれば、私たちはどんな罪からも離れてキリストに今似た者になりたいと熱心に歩んでいるのでしょうか？主にお会いする日は一瞬のうちにやって来るのです。その日を心待ちにするその思いは、私たちのうちに増し加わっているのでしょうか。その日を迎える準備はできているのでしょうか。私たちに明日があるかはだれにもわかりません。私たちが亡くなるのは10年後かもしれません、20年後かもしれません。でも、確実に言えることは、必ずどこかのタイミングで、私たちは死を迎えるということです。主にお会いするその日がやって来るということです。その準備が今できているのでしょうか？

もしまだ皆さんの中に、この神様と個人的な関係を持っておられない方、この神様を個人的に知らない方がおられるのであれば、ぜひ次のみことばによく耳を傾けてください。私たちは例外なくいつの日

か必ず死に直面するということを見ました。私たちは例外なくいつの日かこの世での一生に終わりを迎える日がやって来るのです。でもそれだけではありません。ヘブル9：27に「そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、」と記されていました。また、ローマ2：5-6には「：5ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。：6神は、ひとりひとりに、その人の行いに従って報いをお与えになります。」とあります。人には死だけではなくて、必ずさばきがやって来ると聖書ははっきりと教えてくれていました。私たちみんな、死が必ず起こる現実のものとして知っているように、聖書はさばきも必ず現実のものとして起こると教えているのです。もしかしたら今あなたは、あなたを創造された神様のことを考えようともせず、自分自身を満足させるだけの生き方を追い求めているかもしれません。この地上での生涯に、自分の好きなように生きていようとも、何の結果も伴わないと思っているかもしれません。神様を無視して逆らって歩もうが、自分には関係ないことだと思っているかもしれません。でもよく覚えていてほしいことは、必ず死がひとりひとりにやって来るように、いっさいの罪や汚れをよしとしない、聖く正しい神様の前にそれぞれが立つ日がやって来るということです。だれひとりとして罪に対して燃え上がる怒りの炎から逃れることなどできません。永遠のさばきがそこには待っているのです。

でもこれで終われば、私たちには何の希望もありませんでした。でも、ここには希望があるのです。本来であれば、私たちにはいっさいの希望もなかったにもかかわらず、ほかでもない神様ご自身が救いを備えてくださいました。今から約2000年前に神の御子である救い主イエス・キリストがこの地上に人として来てくださいました。この世界に誕生された救い主イエス・キリストは完全な人であり、また完全な神様であるお方でした。だからこそ、その生涯において一度も罪を犯すこともなかったのです。そしてそんな罪のないお方が私たちに代わって十字架にかかってください、苦しみ、死なれました。この方は何の間違ひも犯さなかったからこそ、死ぬ必要もなければ苦しみを受ける必要もありませんでした。ましてやあんな十字架にかかって苦しむ必要など到底なかったのです。でもイエス様がみずから進んで十字架にかかり、私たちの身代わりとなって、そしてその血を流してくださったからこそ、この方を信じ受け入れる者に罪の赦しを与えると約束してくださいました。でもいったいどうして神様に逆らっていたような者のために、救い主は自分のいのちを犠牲にされたのでしょうか？それはただ愛のゆえでした。私たちの理解をはるかに超えた神様のあわれみが、私たちが絶対に自分では解決することのできなかった罪の問題を解決してくださったのです。本来であれば、神様の怒りは私やあなたに注がれるべきものでした。でも、そんな私たちが受けるべき罪の罰をキリストが代わりに背負ってください、罪に対して燃え上がるその御怒りに代わりに耐え忍んでくださったのです。この方が私たちのために十字架にかかって死なれ、墓に葬られ、そして3日目によみがえられました。これが、神様が私たちに示してくださった大きな愛でした。Iヨハネ4：10でも「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」と記されていました。だからもしまだこの救いを自分のものとされていない方がおられるのであれば、どうかきょうこの神様の前に自分の罪を悔い改めて、イエス・キリストを自分の救い主として信じ、受け入れてください。この方にすべてをささげて生きて行くという人生を始めてください。この方のうちにのみいのちがあり、この方のうちにのみ救いがあります。そんな方をご自分のものとしてください。

また、もう既に今、主を愛して生きておられる兄弟姉妹の皆さん、ダビデは確かにひどい困難に遭っていました。でも彼は自分の終わりというものを正しく覚えて、神様の栄光を忠実に現そうと生きていたのです。ほかのだれでもない主のうちに希望を見出して、そしてその主とお会いする日が必ず来るのだと確信し、歩んでいました。私たちも同じです。日々の生活でいろいろな問題に直面することは確かにあります。私たちはみなそれぞれ違った問題に直面し、心が悩まされることもあります。先が見えず

に苦しいこともあります。でも、私たちはいつも忘れないでいられる一つの事実があるのです。この地上での人生は、その後、待っている永遠と比べればあっという間だということです。大きな苦難に置かれた時も、希望である神様に助けを祈り求めて、私たちは生きて行くことができます。そして何より本当の住まいで神様との交わりを永遠に楽しむことができる日が必ずやって来ます。だとすれば、そんな喜びをいつも覚えて、そして日々置かれた場所であかし人として、主の栄光を現す者として忠実に歩んでいきましょう。